

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 7 (R元. 5. 29発行) 文責 校長 福田雅也

親子の愛情

「親思う 心に勝る 親心」

聞かれたことはある歌だと思いますが、この歌は、江戸時代の終わりに、幕府を非難したため、安政の大獄で、処刑された吉田松陰が、29歳で処刑をされる1週間前に詠んだ歌だそうです。親孝行であった吉田松陰が、自分の処刑に当たって、親が自分の死んだことを知って、どんなに悲しむだろうかと、親に先立つ親不孝を悲しく思っ作った歌と言われています。この歌には、「けふのおとづれ何と聞くらん」という下の句があります。全部の句の意味は、「私が親を思う心よりも親の慈愛のほうのはるかに勝っている。だから、今日の私の死を、私の父母はどんな思いで聞くのであろうか。」となると思えます。

吉田松陰という人物が明治維新に大きな役割をはたただけではなく、その人となりの偉大さが伝わる歌です。またそれとともに、親の愛情の限りなき深さが心に響く素晴らしい歌でもあると思います。

この吉田松陰の歌のように、親が子に注ぐ愛情を表現する言葉として「無償の愛」という言葉があります。この言葉、特に母親が子どもに注ぐ愛情として使われることが多いようです。確かに、母親にとって我が子は無条件に愛しい存在でしょう。何があっても守ろうと思うだろうし、子どもに何かあったなら、自分の命と引き換えにしても助けてやりたいと思うでしょう。なんの打算もなく見返りも求めず注ぐ愛。それが「無償の愛」と言えると思います。

しかし、こんな考え方があることを目にしました。それは、「本当の意味での無償の愛、それは子どもが母親に向ける愛だ」というものです。この場合の子どもは、赤ちゃんをイメージしていただくと分かりやすいと思います。母親がどんな性格であろうが、どんな状況で暮らしていようが関係なく、ただただ一生懸命、母親を求めてきてくれるのが赤ちゃんです。状況や言動で母親のことを嫌いになることは絶対にはないのです。たとえば、お母さんがイライラしてようが怒ってようが、いじらしいくらいに抱っこを求めて手を伸ばしてくれるでしょう。笑顔向けるとそれだけで嬉しそうな顔をしてくれるでしょう。母親のありのままの姿を全部受け入れてくれる。これこそが、本当の「無償の愛」ではないか、という考え方なのです。私は「なるほど」と思いました。そして、このことは、少し成長した小学校時期の子どもであっても、ある程度はあてはまるのではないかとも思いました。

こう考えると、「無償の愛」とは親子間の愛情と言えるのかもしれませんが。

また、優しさとは逆に誰よりも厳しい教育や躾ができるのも親しかいないと思います。子どもに対しての深い愛情があり、その子の成長に大きな責任を感じているからこそ、誰よりも厳しい教育や躾ができるのです。そして、子どもがその親の期待に応えたいと頑張れるのも「親子の愛情」があるからでしょう。

教師という立場からこれらのことを考えてみると、私たちと一人一人の子どもたちとの関係は、どんなに頑張ってもこれら「親子の愛情」には遠く及ばないと思います。

しかし、少しでも「親子の愛情」に近いような感情で、子どもたちを可愛がったり、厳しく指導したりしようとしているか、私たちは、日々その「思いの強さ」を問われるのだと思っています。